

コメント

鄭 美愛

景観研究資料としての写真

浜田先生と藤永先生の興味深いご発表ありがとうございます。70年前と現在の2枚の写真から、景観を比較した分析・考察が可能であるということが、ご発表の趣旨であったと思います。

景観写真は撮影した時点の自然環境や文化的な様相を生々しく記録できるため、さまざまな分野において資料的な価値が非常に高いと考えられます。外国で写真撮影をするときにはいつも好奇心と期待感をともないます。しかし、その写真撮影の目的が単なる観光客としての好奇心ではなく、学術的な関心に基づくものであるとすれば、撮影という行為には一定の体系性が求められなければなりません。藤永先生が述べられたように、地理学者にとってフィールドでの写真撮影は調査の基本です。地理学的分析と考察は、「景観の観察」から始まります。地理学を研究する人々が写真を撮る時のテーマは常に「その地域らしい景観」をフレームに収めることにあります。澁澤らは地理学徒ではありませんが、「地域らしさ」の発見は彼らの関心の範疇にあったと考えられます。70年前に彼らが撮影した「澁澤写真」にも、当時の韓国らしい自然・人文的景観が刻印されています。

私は2004年の韓国滞在中に、八久保先生、浜田先生らとともに「澁澤写真」の場所を探す作業に参加させていただきました。一緒に訪ねた蔚山は、大学在学中の巡検で訪ねた場所とはまったく異なっていました。70年前の蔚山を現在の景観から見つけ出すのは困難であろうというのが私の第一印象でした。

「澁澤写真」が撮影された1930年代の韓国においては、朝鮮時代同様の伝統的な要素に近代化の影響が浸透しはじめた時代でした。しかし、「澁澤写真」に写されている写真は近代化の要素を注意深く排除した農村景観です。写真5に写されている蔚山には近代化の要素はまったく認められません。しかし、70年という時間が経過した写真6では、今度は伝統的な要素を読みとることがほとんど不可能です。蔚山は韓国の代表的な工業都市であるため、このような極端な景観の変貌をとげたといえますが、他の地方都市においても70年間にわたる景観の変化は蔚山同様激しかったと考えられます。

蔚山の工業化は1960年代にさかのぼります。1962年、蔚山地区が国家工業団地に指定され、1970年代に石油化学工業を中心とする臨海工業地帯が形成されました。また蔚山は韓国を代表する企業の1つである現代グループの拠点でもあります。1970年以前までの蔚山の中心地は、太和江(テファガン)の北側でした。しかし工業の発展に伴い、1980年代以降太和江の南側で住宅団地などの開発が進みました。太和江の北側に立地している既存市街地は道路の幅が狭く、1990年代に入り商業中心地が太和江の南側の南区へ移動しました。

もう1つの撮影地である、写真7の荏子島(イムジャド)には、朝鮮時代に馬を飼育する牧場が設置されていましたが、1796年にこれを他の島に移し、農耕地としての利用が始まりました。この島では、エゴマがたくさん穫れたことから荏子島に名付けられました。島の土壌は砂質土であり現在はネギやタマネギの生産地として知られています。荏子島は離島ですが、東に位置する智島までは架橋され、本土から直接陸路で結ばれています。智島から荏子島まではフェリーでわずか15分です。しかし、以前は木浦から船で6時間もかかりました。島の中心地は写真7・8の場所でもある鎮里(チンリ)です。鎮里には荏子面の面役所があり、70年前も現在も島の中心地としての機能を持ちます。荏子島のような離島では水田は貴重であり、写真7にみら

れる水田景観は現在でもあまり変わっていません。浜田先生のご指摘にあったように集落全体の土地利用の基本構造は変わらないものと思われます。しかし、全体から見ればわずかではあるものの、集落を象徴する景観には変化も見られました。写真8の塔は1997年再建築した鎮里教会です。韓国では解放後キリスト教の教線が全国に拡大し、荏子島のような縁辺地域といえども、中心集落には教会の塔が必ずみられます。

写真5・7に写し出された70年前の景観は同様に農村的でした。しかし、現在撮影した写真と比較すると、一方は原景観をとどめない高層ビル群に変化し、もう一方は構成要素をかえつつも現在も農村景観を維持していることがわかります。蔚山、荏子島の2地点の例から、同一地域において過去と現在の変化を見いだすことに加えて、異なる地域どうしで過去・現在の景観を比較することによって得られる知見も多いことが理解できます。

荏子島の西側に位置するソムタリという島で開かれた波市(パシ)という定期市の写真からは、「澁澤写真」で見いだされた韓国の原風景を探すことは困難です。この写真に写し出された人々の服装や家の作り方からは、むしろ近代化の影が見て取れます。特に子供が半ズボンをはき、ランニングシャツを着ていることから、この写真の地域では日本の影響をすでに強く受けていることが推定できます。

「澁澤写真」に記録されたメモではこの波市が荏子島で開設されたと読めますが、実際に開かれたのは別の島でした。「澁澤写真」を撮影した日本人にとっては正確な地名を記録すること自体が困難な作業であり、加えて70年を経過した写真に写された場所を特定することも困難です。すなわち「澁澤写真」の撮影地域を特定することには限界があります。これからの作業をより効率的に進めるためには、韓国の撮影地域で活動している地元研究者と連携した検証や分析も必要です。地元の人々の知見を借りれば資料を形にするのに時間的な節約も可能でしょう。アルバムの中かで眠っている写真を叩き起こして、記録にすぎない写真を資料として目覚めさせる必要があります。

写真は非文字資料ではありますが、地理学を含む多くの学問にとっては文字資料以上の価値を持ちます。「澁澤写真」をより有効に資料化・体系化するためには、浜田先生が指摘されたように、時間と手間をかけて撮影場所を検証する作業が必要です。